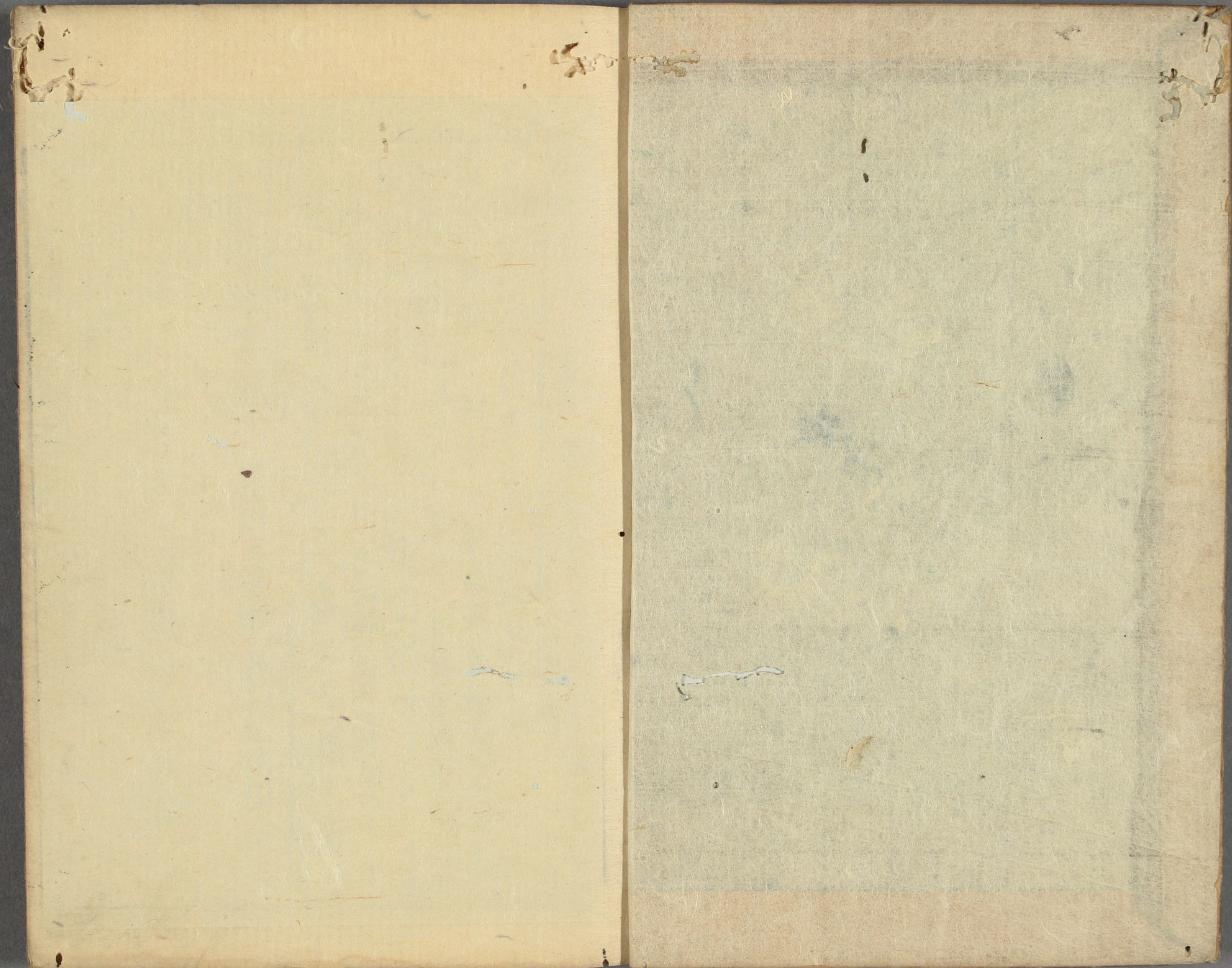


初懷紙

二





初懐紙

信濃伊九撰釋

愚考初懐紙の百歌を梓行を予し書こ
しよ小鶴百歌と唱へて題号なり此百歌を
前五十歌後五十歌と二層よ成就しあり
もの有り花故事といひ注書るを初懐自
注と号して前五十歌の解有りさまた
茶五十歌よ牧足千里出た後の身る不系
後目を不ト峻水和春の三子出たに世人
志るところありとすねていひ
目此書をとすうに終のあり

四二

初ふきこのき去年の相れ実

愚考目のもまを月の林よ對しての雅
云るの服を重代を祝して相の実と依
りし相を鳳凰の栖す一きまをまて撰
出してれ白依るり初を懐紙をいひあり
雪村の柳見えよゆく掉さして
一書よ名を生茶の葉よいひなねんかてよ書
雪村のみほくら柳を見よ初といひあり
や貞徳の白くもさあり
の柳人名よあり宮古上下桂の男の因
中よありて雪村の文ありこふいり本振
の佳るりをををありありありありあり
と多き保の昔洪水よありありありあり
方のる彼比及諸中諸の人の字とよ今八部を

酒を愧ふ入相れ月
林の山を女の弓のきうらむ
炭火竈 出ぬてきれちうらむ
里しし乃まふのうけむら綴

愚考愧を新厨集 ふトハリるり門帷
戸帷といふ別 暖簾とよまふ弓ハ半弓
るり日本紀曰 神后皇后四十六年百海
必の宿古王より献ふといふ新厨集
といふの沃をひとこ集よ献す
氣のる 弱よむたかひをよ
新厨集にきし三島をぬむるる連ハ

一書ふ云氣の自往をぬむるる連ハ
故りといふ書有てその注よ曰箱根新
よとありてるをたれいよせしる新向甚

たれいよと云く 予はしりしれりらく
申し氣の自往るりといふめりる甚しき
華説るりる連伊豆の三島を東海乃
るりる連を拜むるるとる流り一きや亦川
より川端一初るるといふをきしや 亦連ハ
往還るり海乃と出るりといふ一きとる
いよむ往還るりる連伊豆の三島を東海乃
るりる連を拜むるるとる流り一きや亦川
心々神社考曰伊豆の三島を東海乃
能因法師 詠和歌 侮大雨 禾不枯云々
三島の額を奉儀 依理 卿の著之日本
惣誌 守三島大明神と云く 天孔川 苗代
あふをきしとせあふりりや守神るらハ
神よの伊豆國三島を拜むるる連ハ

さやからむすりそまの弱ふ用おかひせ
よしく解しるるなりうらふ本極のありきり
せし解をせうりうらむ花説ふうらむい
之島と申由來を面足号就ふまうして現連
あはは就化して石と形のは母蓮葉方丈
羸例の三島浮ひ出の故よ三島と申すなり
三島を歴武帝天平五年に出現するつと
まも存宝龜年中伊豆よ迂産孫はよ
うは守とるなり又漢暉新後葉よを海乃
必りして能周よ雨乞の欲をもととなりぬ
伊と申實徳る建たおまうらむる伊とれい
實説るらむその禮次下よ申
急佛よ狂人傳いはくあり
愚考或りのよ叡山の平等供奉とりい

僧をたをせりて白夜の張りて是詠
を履るるる葉れ育一下り足説よて後船
をまのひ伊よの邊一下り足説よて目を
送りたる玉の守れ鼓うりて才子淨言何
園梨よ對面ありて又を建よりのゆく葉も
あらはれ出れりるとまもせし建ハ三島も伊と
るなり必定るなり

濟りてく連歌の無をせりて後
敵よせらぬむら松れ舞
皆以の梨よ子打鳥帽子為りなり
五葉日松氷彈正久秀忘其の蝶よを建歌
具りありしよ敵ららりく餘波を冷く
まよ今一白階むとて若白すきまより
芦のひらむら淡浪の阿さきこりよの登と

暮つては片げくつりたり 愚考は松永の侍を流
 させり附る宗祇の佐をむ
 うき世の流ゆを喜め見えをせぬ
 借まゝ一室の本槿のちりてぬよ
 のちすむ女きぬてうらら
 山崎并乳をその心猿の聲うま
 いのちを甲斐の代とも見えよ
 法の七我急装を 世れあむ
 ばらう一礼をとりちり子の戸
 笑目より車こそゆるまぬれ陰
 たらしき小雨のゆゆるなみ
 のころ雪のころくく一礼づきく
 春の故より流えきと通りよそ子細なり
 志はくれば群一して葉をとる歌

はら 四

後者のねりくくくはりの終朝
 くらげくく眉をくくくまきぬく
 くらくつて膝よ見えゆ宿るの事いや
 愚考は源氏林の巻よ改申将破とりあふ
 よ借る楽をくくくくその夜ゆよくら
 いとちりくく傳きぬくおのしぬよやうり
 りよ源氏とあむの君の流くく歌のま
 一付らり源氏すけをくくくく歌を
 ぬのるよ志なきよくくくくく歌を
 くるくくよ此おの流ようこくく歌を
 ぶ歌を借るよよ一應一次に流ゆの
 付眉くくすくくおの君の流よく日
 何のらまて流くくくくく歌を
 くらくくくくく歌よおのくく

まじくうらへしつげりてゆきしるり
一書に漢か納言の骨又を楳の巻の五
つむの如修法の付ると注するを更よそま
くもたもへらぬくましく暗しつ
紫ふれゆふ矢筈切よ入
のまじとて人のうけしる 狐罨
阿らま月夜のくもらふ 傘
石の戸極 鞆言の坊よ住よひて
我三代の 刀 三 刀 無 活
愚を乃伊賀ちる金乃三代目よ日本無活の
字通と語を切らむ伊賀ちる金乃ハ日本
カニ官職執業め家扱しりよよしうく
を切しりのるまじとまを路よ切て歌
うししる処よその感勢をを元香三代

はつ 五

と依りまらたのしるきも依るり
永祿も金乞しし松孔燈
辺江の田植 矢流よ知くむ
一書よ只上代の傳と金乞ししと
よりむししをいふる昔もあるり
して入金のとみしきるり
邊江の田植 矢流よ知くむ
をきく田舎とみらしし
う海の自任といふるもの
注ありしとみらるる皆暗し
とく起てはつ揚よちむ時考
新よ茶湯の浦あしむ
筑紫よて人の路をみり連て
愚考存勢のものしりよ業平 後衣よ

云の言玉の信ら此是よ太宰公或い
はきり付る似て何事とて定めりし
申のよ玉の信ら此是よ太宰公或い
法勤の堂に於ての事
待よの障を障らる子の申
なよの障のおうきこれ障
るよの障の信ら此是よ太宰公或い
門を魚を寸儀障らる寺
眼をきよりの障ら此是よ太宰公或い
あゝおの牧の信ら此是よ太宰公或い
愚考儀障の此寺を障らる寺
の武士らりの信ら此是よ太宰公或い
統日本紀曰文武天皇四年於法宮宮牧
地設牛言云々

信の障ら此是よ太宰公或い
乳の信ら此是よ太宰公或い
標の障ら此是よ太宰公或い
愚考儀障の此寺を障らる寺
細霧の障ら此是よ太宰公或い
古今集よ秋の障ら此是よ太宰公或い
るり光を障ら此是よ太宰公或い
入已り火を障ら此是よ太宰公或い
まゝの障ら此是よ太宰公或い
せの五文字又う障ら此是よ太宰公或い
此の障ら此是よ太宰公或い
人何の障ら此是よ太宰公或い
酒壺いよむ金山の酒
愚業是よその目の障ら此是よ太宰公或い

此の金山の洞と云く盗人の住居し酒と
とりの物ゆゑを事とせしむる事と
乞ふ川上系師の侍あり

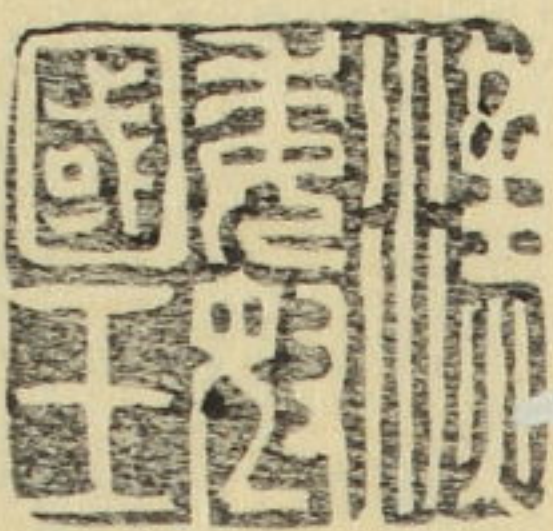
此の武仙と云く画よりせ
系よ波すり醒の年 此 水

年元月れ多十二月酒盛いさむる川上
系師此國の武仙を日本武名日本紀曰
景行天皇二十七年冬十月熊襲を討
たむ時たす十六年則十二月熊襲を討
たむ時ありしを地取の侍を領ひし
ありし熊襲の魁師より川上系師といひ強
力の大将ありしを襲を解きて是す女の姿
ありしをひそぐれ系師の酒高の時を領ひ
ぬを洞のうちに御ありて系師の室に入

女との守ふ交りよあり系師その去りの
容姿れ悉ひて則身を携て序を回し
て盃をあげて酒をのませはく戯弄す時ふ
夜更て人うすしきぬ系師又酔ぬはに
日本武名洞のうちの奴を抽て系師の駒
を刺りしありしを及りて系師を打
てしよとすはくく侍ありしありの時ふ
奴を爲りて侍ありし系師死て云汝を流
人もや對て曰吾を是大足彦天皇の子と
名をて日本皇男とりし系師又死て云
系を是玉れ中の強力を是をとりて
時の法人秀威力も傍にありて後ら
りしありし吾もこふ武力ありし
といふの皇子のありしものありし

りて後一子奴の陋一子口をりて号
 号ををらむ若融多らむや曰融一
 則魯て曰今より後皇子を号けり
 て曰幸武皇子と稱するなりといひ終て
 即胸を通して殺し今に至りて日本
 武号と稱し中を彼系所々号けり
 一号号の時よ系行天皇二十七年二月之
 さくらの悪侍怒發といひる筑紫小墾
 虫一して人王十一代垂仁天皇八十六年丁
 己漢光武中元二年漢朝よ貢すりよよ
 して國王の印を鑿て賜ふ其印文化
 年中筑紫必よて去甲よりぬる金印
 の摸方八分程白字小篆

はろ八



印文 漢委奴國王
 文化三年迄千七百五十年也

後漢書東夷傳曰建武中元二年倭奴
 國奉貢朝賀使人自稱大夫倭國之極
 南界也光武賜以印綬云句の面を年
 とら時分のりよて彼窠をて一益人共
 も酒盛積よと附しれとも次の筑紫川上
 象師と引起して附するなりをそのの
 穴よ金山といひ強盜すみりよや金山の
 洞といひるなり一此國の武とよる日本武と
 り入陸し初と和漢傳曰武略神通日本
 武術之大祖也尾刻焚田大明神等之

さて此書を鑑みしうは守りまゝの
画工よまゝと雖も三台此書といふ
とてその書名をうは守りまゝ
兼川の石水とて一かきしては
剣醒井とて一かきしては日本武
尊伊吹山の標とて大蛇を踏
つた時火のさしとて一かきしては
井の清水とて一かきしては
あまのついでと号すまゝの故
はしるは守りまゝとて日本
征伐とて一かきしては
よまゝとて一かきしては

玉川やあつと六つ此所
に湖といふまゝより

知花の書 精よす 見ゆり
愚考傳字紙よ白後教 終
みるまゝのとも見ゆり
年よりより終のうら
み入るり 一古教
行うこうせを
南心く葛城の細の雲
親と基をとうり
候はるる櫓の度
費よ 常り
一書よ櫓の葉よ
とていけよ
書を附しり
心をとる

一書よ櫓の葉よ
とていけよ
書を附しり
心をとる

愚考伝字紙よ

辰虫としふくさうしうりさり直しあふを杖
 の心を慈とりひきまはさ此依例并極妙もも
 出しり又右指りも直将愁字依杖心
 鹿れ音をとりひきまはさあつて也
 愚を考廉の音字の音もあつてまはさるり
 るりあつて心を入てまはさるるまはさるりまを
 近海の徳土言れ音字の音字の音字
 の音字を集中せしめ及く音字の音字
 そのまはさるりまはさるりまを一極
 心ゆきまはさるりまはさるりまを
 琴の音字の音字とまはさるりまを
 の音字とまはさるりまを
 出さるりまはさるりまを
 犬もまはさるりまを

まはさるりまはさるりまを
 いへんとして梨子とまはさるりまを
 るり梨子の花とまはさるりまを
 漸ぬるりいと久松平木の依例の音字
 とてまはさるりまを
 してまをわしりの族実まはさるりまを
 は亦新名目の歌の依例の音字
 歌まはさるりまを
 し割しあつてまはさるりまを
 とまはさるりまを
 するりあつてまはさるりまを
 母の族をいへん及くまはさるりまを
 とまはさるりまを
 するりあつてまはさるりまを

しのすし等の新ぼらむ 月
 台の雨枝七里をめぐすらむ
 何弱海内めきれ川面
 水らるる水底く音ハ師をまて
 旅させうりの院しを困
 二月の蓬萊人もすさみんや
 婦よらの牛の通き日の新
 胸もろぬ熱の縮を減つて
 おりおいあふもり昔の菊さし
 暮のきふを柵休てた、雇啼
 本魚きさこゆる山陰りしも
 因人たをわけて休むら新月夜
 旅さししおすもりの旅さしを
 同し河霧と雲の名を替りて

あつた

心なるしむせを 蝶れ ころ
 三ノなふむを新の機より山
 一書ふ傳ふ曰より 新の機を正花るるを
 新しおすして新く口傳あり所傳を受一
 ありしをさるるのきれらるる
 行傳えたりわきまをよきまを
 行より新しむる新のうけり
 思ふより機集めしむり一機を正行の思と
 りよふふ高むすいて新しん足伝ありしを
 空の行なりしを伝ありしをさるるを
 ちなりしをさるるのや既中烟を新基
 卿ふん新しむるをさるるのや新基
 行より新しむるをさるるのや新基
 すそめらるるをさるるのや新基

又と持母のあつちといふ事し〜時らふつらり
しうや或時申納きの内北人の歌よのつて
西國よりの歌さる一羽さるを伴ひ見え髪
を削てみちえく〜鏡よ引色みしてさる書
しりゆさめうきさるるめあら〜さるに
しりても袖をさるらぬと書てふねふ
さけ入侍りて後ひさす〜れよひえてあ
あよ高急南極らしてあひすま〜て侍り
たるとさるり中級を見えあひて雨雲と流
くさるあひさるこそしては危く時り〜さるく
烟管を私〜侍りさるの終ふあないのさる
侍り〜さるさるらるむ人さる〜侍りさる
席の後〜さるの代あて朽たさる丸木の
見え侍り〜さる柱ら〜さるを只お〜さる

あつち

さる〜さるし〜さる本のさるる〜さる〜さる
〜さる〜さる〜さる危の情を〜さるれさる
〜さる〜さる〜さるあ〜さる〜さる〜さる
〜さる〜さる〜さる〜

竹吹子〜筆あら〜さるうりて
梅〜さる〜さる〜さる自いさるりさる
むらさくよ石の竹火吹き〜さる
地〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる
侍り〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる
樽撰〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる
愚考〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる
〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる
〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる
あつち〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる
あつち 三台さる

一うくはを本件と心得るの上よりなるを
角も自在の居りしつゝ何れも之を能く
しるる事又なつてを不自由の事と見
のつゝ一うくは二つはありしつゝ何れ
つゝ宗函の云ふも此も其の意しし何れ
の意しし古往遺事二つありきつゝ何れ
出づれば見よて毎を自傷の事なりし
も是くしてありし法之を以てありし
を云ふらしては必ず二つありしを以て
を云ふ今も稀としてあるよとていつ
よ及ぶすのてよとてありしを以て
も一うくは有りしを以て其の本件なる
を云ふは切なりとてありしを以て二つ

三つは法のみならず其の事云は後なるの罪人なり

張其の如きなり代やまことゆらむ
吾士とよむるありしつゝ一見

愚考張其の治世より一里塚を築きて往來の
人を導きしなり其の愚考をたゞしむるは
造りしつゝ一見ありしつゝ余の將軍ふ
うこりたりその名はよきと見しつゝ
其の世の例を他國より取りしつゝ
あり又唐國の児の名なきつゝ本朝一
ゆりしつゝ一見ありしつゝ其の
て貞徳ありしつゝ其の創のありし
ありしつゝ一見ありしつゝ其の
つゝ一見ありしつゝ其の
曰東海上有居士仕焉萃仕兄弟一入

世を誤りて吾不長天子不友法侯赫而
食之極而飲之吾を求於人吾を求
名を求之祿不仕而事力云又祖
事苑曰居士之四德といひ不
欲蘊德居財大富守道自悟云
紅ふ牡丹十里の香を分て
愚考東坡賞牡丹待十里珠簾半上鉤
と云ふ牡丹十里香の名あり千里の香と
すり多非なり

雲す心谷ふ歩の湯と云
岩根ふ弁ききく沈菴を考ふす
笑一や三井の香法師と云
此傳さる考法家の字案を待
物のぬき考ふふに致す

管弦をいへりや管の考ふなり
何れ盧山よとありての考ふ

愚考管弦と云々絲竹の考ふなり
白虎通曰八音者樂記云正曰埙竹曰管
皮曰敔敔曰笙絲曰弦石曰磬金曰鐘木
曰祝故云或云管弦或ハ磬鼓と云す
ふなりやと云は是別の盧山ハ枕詞より
枕詞を日本の文苑なりやと云ふ日本
盧山ありて山寺の後流院院實云云
任心覺瑜上人の建きよりて系与所
今出川通よりて曰系考ふなり昔の愚
遠法師を翁と化して盧山ハ二の考
任心ふ授くよりて日本盧山天台寺
と号す

子孫とありしなり 親善の仇名
おいらはすそなる川の川傳の
尾をよみしり 杉のたきし
藤原の七尊よりきり花自
一連のふとくくくくくくくくく
一奉おろこよよよよよよよよよ
愚考の傳よ曰花よを傳のけけ花を
一白よしてけけけけけけけけけけ
白意のりして茶後よ花の葉あり故ふ
女子とすりきり甚しききり古歌より
よよよよよよよよよよよよよよよ
ゆりよりの花の葉すすすすすすす
とありしを又傳よ細きよ花
るるるるるるるるるるるるるるる

はら十六

るるるるるるるるるるるるるるる
一傳よとくくくくくくくくくくく
を傳よとくくくくくくくくくくく
歌をとりて花の仇あり新古今集よみ
のく九十尊のすのふも七尊よ君を
せせせせせせせせせせせせせせせ
りよ初よとせせせせせせせせせせ
つと揚白の仇あり一花のさそふむ
けけ花の仇あり昔ありんてあゆふ
さけらりりりりりりりりりりりり
らきりの毎本と謂はし一又曰揚白よ
て意をきりしとを意を一白よして
の義理ありしはるりりりりりりり
意味あり口傳

はら十六

